

APL, Jによる機械翻訳と私のフランス語をものにしたい思い

西川 利男

かつて、APL, Jを用いて小さな機械翻訳システムを構築した経験と、最近感じている私の何とかフランス語をものにしたいとの思いを小文にした。

1. APLに出会うまで

APL との私の出会いは、筑波の国立研究所に勤めていたころに始まる。工業技術院（現在では産業総合研究所）の大型汎用計算機を管理する研究計算センター（R I P S）に出向となり、そこでプログラミング言語の担当となった。理工学の研究所として、大部分のユーザは FORTRAN であったが、一般的な COBOL, PL/I を含めて、やや特殊な LISP, PROLOG, Smalltalk など、そしてパソコンの登場とともに BASIC と C が新しい言語としてもてはやされた。

同時に、スーパーコンピュータ CRAY が官公庁として始めて導入され、その入出力インターフェースマシンとして IBM が導入された。IBM のスタッフと一緒に仕事をしている間に APL を知り、プログラミング言語担当として、やがて APL のユーザ教育、講習会を行うことになった。IBM の APL の研究会にも出るようになった。

2. APL に入れ込んだ数年間—とくに機械翻訳への試み

数あるプログラミング言語の中で、特に APL に入れ込んだのはどうしてだろうか。筑波に配属された IBM のスタッフの中で、特に浜田節夫氏と知り合ったのは大きい。氏とは私と共著で「基礎からの APL」を、著わすことになった。

一方、APL の国際会議に数回にわたって参加し、APL の研究発表をするようになった。私の専門である化学のもあるが、機械翻訳への APL さらに J を使ったの試みを発表した。

なお、RIPS の研究テーマの一つとして、京都大、長尾真教授との日英、英日機械翻訳の共同プロジェクトが行われていたことも、私の関心となったのである。また、当時、私自身、国際共通言語、エスペラントに熱をあげていたこともあった。

APL 94 Conference, Antwerp, Belgium, 11-15, September (1994)

Toshio Nishikawa, “APL as Multi-lingual Communication Tool: A Small Machine Translation System for English-Esperanto and Japanese-Chinese”

Abstract: A small machine translation system was developed in APL. (中略)

For the time being, as a prototype of machine translation, we installed the easiest language pairs, English-Esperanto and Japanese-Chinese translations.

APL 97 Conference, Tolonto, Ontario, Canada, (1997)

Toshio Nishikawa, “J Installed String Manipulations Applied to English-Esperanto Machine Translation.”

Abstract: J has been widely used for mathematical computations. However, it's less often used to so string manipulations such as machine translation. (中略)

We adopt English-Esperanto as a pair of translation, because of simplicity and regularity. Thanks to the power of J, especially 'box' and 'each' codings, we ca expect a compact translation system.

実は、この間に私自身、筑波の研究所を定年退職するという変化があった。そして、千葉工大と統計数理研究所で、非常勤勤務となった。なお、トロントでの APL 国際会議の私の直前の発表は、鈴木義一郎氏であった。

3. フランス語は難しい。だが何とかものにしたいものだ。

上のすべての勤め先も、いまやすべてなくなった。身のまわりもいろいろ変わってきた。だが、私と APL, J との係わり合いはなお続いているし、関心も変わっていないつもりだ。

プログラミング言語だけではなく、いろいろな自然言語に興味をもっているし、うまくなりたいと思っている。

山本洋一氏とは、エスペラントをはじめ英語だけでなく、フランス語、イタリア語、さらには、中国語、韓国語と、マルチリンガルというテーマで興味を 'colaborate' している。フランス語で「星の王子様」を一緒に読もうというのは、掛け声だけでいまだにまだだ。

フランス語は難しい。いやな言語だ。どうもものにならない。だが、何とかしたい。耳と口からのフランス語はフランスに行かなくては、到底むりだ。モーパッサンの「首飾り」などの短編の仏日対訳書が手元にあるがてこずっている。

しかし、私の真の目的は、サイエンスやコンピュータのフランス語を読みたいのだ。Gerald A. Langlet の *Idees et Algorithmes* などの文献を行を追って読みたいのだ。

いまや、ネットで使える仏英機械翻訳を利用したこともあった。英語ならよく分かる

それにしてもフランス語とは、何で良く使う動詞にこんなややこしい変化形を強要するのか。モーパッサンにこんなのがあった。

il fut un jour enoye en reconnaissance

英語でいえば、次のようである。fut = was など、みんな、これを覚えるのかよ。

he was a day sent recognition (偵察に行かされた)

イギリス人、フランス人などヨーロッパの人は生まれながらにこれを当たり前の素養としているのか。以前の J の機械翻訳で、フランス語でもやってみようかとも思ったが。

科学、技術からは、何でも Global でとなるが、文化、民族からはわれわれの身体ディメンジョンに合った Local な多様、多彩な世界こそ自然なのかもしれない。